

## 短期大学における「心の教育」の展開2 －価値への近接－

Practice “moral Education” in Junior college 2  
－ Approach the Value －

安部 孝 (こども学科 専任講師)  
石山 貴章 (九州ルーテル学院大学 准教授)

**要旨** 本稿は、「短期大学における「心の教育」の展開1－価値への近接－」の続編に相当する。本研究では、「ボランティアとNPO」の授業実践を根拠に、学生の認識が本来的な「ボランティア精神」や関係する様々な価値に近接し得ることを確認した。学生は、学習の各段階で、人間生活における様々な心理、状況、判断などについて考察し、「気付き」を繰り返すことで価値を見出し、また自己の内側に抱くことができた。しかし、一方でこうした本来性への拘りは、時として出口の見えない自己省察に陥り、「動」のイメージであるボランティア活動への具体的な取り組みを躊躇させる可能性を生み出してしまう。振り返りを通して自他（自利利他）の関係に気付き、「お互い様」という相依相関の関係を築きながら、各人が自己の内側に秘め持つその純粋な精神を害<sup>ま</sup>さうことなく、むしろ見守る眼差しを自覚し、それを育むことが「心の教育」の展開の中心的課題であると考えられる。

【キーワード：心の教育 価値 ボランティア精神】

はじめに

本稿は、「短期大学における「心の教育」の展開1－価値への近接－」の続編に相当し、考察の根拠となる「ボランティアとNPO」の授業実践の概要（手立て・活用資料・視点・考察）に始まり、実践結果から立ち上がった成果や課題を踏まえ、また、学生の気付きや変容を基に考察を行い、新たな課題を整理したものである。

なお、実践を通して学生が抱いた課題意識や気付きに潜み、考察を通して徐々に顕現された課題等については、安部と石山が共同で、その解決のいくつかの視点を提示し、また、検討しつつ考察を行った。

本稿では、1編の論文としての目的と体裁を保つことを目的に章を「I」より起こしている。ただし、前編「短期大学における「心の教育」の展開1－価値への近接－」との構成上のつながりを明確にするために、本来の章、項目を（ ）付で示すこととした。

I 「ボランティアとNPO」の概要 (IV 「ボランティアとNPO」の概要)

1. 展開の概要 (4. 展開の概要)

1) 具体的な手立て

①資料を用いた学習

関わりを考察させる場面として適切と考えられる“生活場面を描写した”様々なドラマ、映画、文章、新聞記事などを活用した。

学生の実生活の中では捉えがたいことも、このような素材を教材として扱うことで、課題の本質を自分に引き寄せて考察することができるかと想定した。

a) 〈気付き1〉から〈探究〉の段階

○課題1：子供への関わり

ボランティアに対する各人のイメージを基に、他者の存在、自他の関わりに気付き、ボランティアとは人間の関わりであることについて追求させた。

【活用資料】

ア) 「赤ちゃんポスト」

イ) 「乳児放置の記事」

ウ) 「佐賀のがばいばあちゃん」

【a) 課題1の資料】

【赤ちゃんポスト】

親が事情により育てられなくなった新生児を預かる『このとりのゆりかご』（慈恵病院・熊本市）。

2007年5月10日正午設置。その数時間後には、3歳児の男児が預けられていた。「関係者の話によると、男児は10日14～15時ごろ、『ゆりかご』に入っていた。県外から親と一緒に来たともみられ、自分や親の名前を答えているほか、『かくれんぼしよう』と（親に）言われたなどと話しているという。…」

『熊本日々新聞』 2007年5月15日

【乳児放置】

「(5月)22日午前7時半ごろ、東京都豊島区北大塚1の店舗兼マンションのごみ集積所で、生後間もない女児が裸のままごみ袋に入れられて放置されているのを清掃作業中のアルバイト男性(33)が見つけた。…。風呂用の足ふきマットがかけられ、口を縛った半透明のごみ袋の中にステンレス製のたらいと一緒に入れられていた。…」

『毎日新聞』 2007年5月22日

【佐賀のがばいばあちゃん】 島田洋七 徳間書店 2007年

「ドン!という音がし、同時に俺はよろけて、身体が前屈みになった。もちろん、いくら昔の話でも発車のベルは『ドン!』などと鳴らないし、発車のベルが人を突き飛ばすこともない。…なんと俺の背中を押したのは、かあちゃんだった。……。俺は、まんまとだまされたのだ。おばちゃんのお見送りなどと言って、実はかあちゃんに見送られるのは、俺だったのだ。…」

【考察の視点】

- ア) 《子供への関わりに対する関心》
- イ) 《子供を育てることの困難》
- ウ) 《既に触れている話題（学びによる認識への期待）》

これらの資料に触れた学生の関心の内容は、「親の責任問題」、「嘘の状況（「赤ちゃんポスト」、「がばいばあちゃん」…子供が大人の嘘によって“捨てられた”）」、「子供の将来（への不安）」である。

そして、これらの事態について何らかの改善や予防の手立てを講じたときに次のことが問題とされた。

- ・「命をどう考えるのか。（優先性）」
- ・「(子供が親以外の) 他人に育てられること」
- ・「そうなる前に（だれか、何らかの機関に）相談すること」

また、新たな問題意識として、

- ・「なぜ、そうしたのかという理由が（自分には）思い当たらない…事実が理解できない」
- ・「子供の状況には幾通りもの意味がある。それは“置き去り”、“捨てる”、“預ける”などだ」

などが立ち上がり、このようないくつかの

共通した語りの中に、学生は意味やそれぞれの当事者の実人生の違いを見出していった。そして語られる一つの状況にも、

- ・「批判を覚悟での設置（ポスト）…致し方ないという見方もある」
- ・「様々な視点（“守る”と“捨てる”）…ポストは命を守るもの、子供を捨てるどころ…という意味が成立する」

など、異なった見解が成り立つことに気付いた。つまり、ここで明らかになったことは、子供に関わり、一見同じような意味合いで捉えられがちな、ある社会事象について、当事者の立場に対してさえも、異なる立場での見解が生じてしまうということである。そして、しばしば一見した段階（次元）では、その当事者たちの行為を否定してしまうことさえもある。しかし、子供はその異なる見解同士の間置かれてしまうことになるということに気付くことができた。結局、この場合、学生は決して資料として採り上げた社会事象の当事者ではあり得ず、“様々な多（学生それぞれの見解）対一（当事者の現実）”が学習の場で浮き上がってしまう。社会の中では多様な考えや多面的な見解が存在し、そのことは個の存在と同様に尊重されるが、実際に当事者

である子供の将来は、ある一方に拠ってしか評価されないという事実も生じてくることになる。私たちは様々な価値観に対象を引き寄せて語るができるだけなのである。このことから学生は、

- ・「自分の捉え方だけで、子供の幸せは語れない」

ことに気が付いた。ある事象に描かれ語られた一人の人間の幸せを、私たちは自分の見で語っているにすぎないのである。

○課題2：関わるということ（「探究」からの段階で）

ボランティア精神について、自分という“関わっていく立場”に視点を置いて考察させた。

ボランティア活動を関わりとして捉え、どのような状況や条件下、また理由でボランティア精神が発揮される(成立する)のかを探らせた。この課題を通して「自分が本当にそのようになし得るか」を考えさせ、また、それが“ボランティア”であるのかを確認させた。学生たちはこの学習によって、ボランティアのイメージや意義を再構成することになった。

【活用資料】

ア) 「D r. 瀬戸上の離島診療所日記」

「D r. コトー診療所2006」

イ) 「赤ちゃんポスト」

ウ) 「母の死とその後」(「山びこ学校」)

【考察の視点】

ア) 《数で表現される人間の生》

資料活用のねらいは、例えば「人口100人に対して1人の医者」という場合の「101人目」の医療のゆくえについて考えさせるなど、数字の外側に切り捨てられた1名は一体だれなのかという、具体性を隠蔽してしまう数のもつ不透明さへの気付きである。この資料で扱うのは生存率・医師数であったが、教師の数なども採り上げることで、よりイメージのしやすさを図った。

イ) 《人の生死への関わり》

この視点は「ア)」と関連させて投げ掛けたものであり、具体的には他者に

対する様々な思いへの関心を促すことをねらっている。

例えば「山びこ学校」における江口の作文では、母の死が周囲の人にとっての「死」という意味あるできごととして、また、それは母の「生」の総括的な問題として語られている。その場合、(母という)「一人」に関わる問題には、「一=1」という数には到底、収容不可能な実人生や濃密な人間関係など様々な意味が込められている。

これらの資料に触れた学生の関心の内容は、

- ・「信じることの困難」
- ・「自己中心的な立場(離島という見方) …これは瀬戸上の見方でもある」
- ・「私の知らないところで生きている人たち(の存在)」
- ・「数字の外側(数字という“イメージ”からは読み取り不可能なこと)」
- ・「自分の力と他者の力(D r. コトーは、自分の判断根拠を医学常識(数字)に置いた。しかし、その常識はある固有性…個人としての患者(ゆかり)…には及ばないものであることを知る)」

などに向けられた。そして、これらを手掛かりに、他に関わろうとするときに人間は、信頼関係を築こうとする中で、自己中心的な立場から、容易に関係の内側と外側を作り上げてしまうということに気付くことができた。それは、人は与えられた数に、安易に、都合よく自分を当てはめ、自己を中心に据えた関係領域を立ち上げてしまうということへの気付きである。しかし、この段階で学生は、内外の領域に配置された、もしくは包摂された存在(数)すら実体がないことには十分に気付くことはできなかった。

【a) 課題2の資料】

【Dr. 瀬戸上の離島診療所日記】 瀬戸上健二郎

「…視点を変えれば世界の見え方は逆転する。離島に住む人々にとっては、この場所がすべての中心なのである。…あくまでも、自分たちが踏みしめているこの土地、日々の生活を営んでいるこの島こそが、生活の、人生の、そして世界の中心である。血の通わない統計の数字では、離島に暮らす人々の数は、日本の総人口の1パーセントにも満たないかもしれない。だからと言って、離島の住民たちをないがしろにしていけないということにはならない。…」

引用：「Dr. コトーのモデル Dr. 瀬戸上の離島診療所日記」(『第一部 離島医療』瀬戸上健二郎 小学館 2006年

【Dr. コトー診療所2006】 フジテレビ 2006年/第7・8話あらすじ (著者要約)

「Dr. コトーは、ゆかりを診察し胃ガンであることが判明。コトーは手術すれば完治すると判断し、ゆかりとその夫に告知する。ゆかりは島での手術を希望する。だが実際に手術をすると広範囲にガンが広がり手の施しようがなかった。余命3か月の診断を受け、ゆかりは抗ガン剤治療に耐える。コトーは、ゆかりに自宅での療養を勧める。自宅に戻ったゆかりは束の間、日常を取り戻し、一日一日を大切に生きようと夫や幼い娘と明るく過ごす。その後、病状の改善が判明。医学の常識では考えられない現実の前に、コトーは患者の生きる希望を否定したことを深く悔いる」

【「山びこ学校」…「母の死とその後」】 江口江一・無着成恭 / 「山びこ学校」 無着成恭 岩波書店 2006年

概略(著者による)…「逃れられない辛く、貧しい生活が綴られている。無着先生をはじめ周囲の人間が江一の仕事を分担し、手伝う。生きること、生活そのものを仲間が支え合っている。さらに母の死を通して死という問題が当人だけのものではなく、他者の生に関わる問題でもあること気付いていく」。

○課題3：究極の状況・行き詰まったとき・限界1(探究) 子供への関わり…ボランティア精神が発揮されること2

【活用資料】

ア) 「Dr. 瀬戸上の離島診療所日記」

「Dr. コトー診療所2006」

イ) 「先生は希望なんです」(インタビュー：アグネス・チャン 「総合教育技術」小学館)

ウ) 「遠い『山びこ』」

様々な活動の具体的な遂行においては、条件や置かれた状況によって限界と思えることがある。これは関係の質的な変化であり、場合によっては関係の破棄や崩壊につながる深刻な事態とも言える。関係の放棄と解消によって、ボランティア精神は時として変わり果てた思惑の残骸と痛ましい傷跡のみを残すであろう。ボランティアに取り組むこととは、この痕跡を人々の心情や実人生に刻みつける可能性を十分に孕んでいることをあらかじめ理解しておくことが大切と考えられる。その意味で、ボランティア精神とは、関係性の善良なる維持機能であり、なおか

つ困難を熟知した繊細さを要求されるのである。

【考察の視点】

ア) 《働き掛けの意味と働き掛けをすり抜ける存在・理由》

目前の対象が、時として私の思いや具体的な働き掛けの対象・受け手とはなり得ないことがある。そこには、私の思いの対象でありながら、受け手として呼応しない一人の価値が生じてしまう。それは、関係の質的な変化であり、私の願いである「救済(対象)」の現実的意義の消失状態である。学生は、Dr. 瀬戸上やDr. コトーの資料からこのような「一方通行」になってしまうことによる「双方向の関係性の不成立」に気付くことができた。

また、難民にとって学校や先生が希望となり得る理由の考察を手掛かりに、他者が抱く希望や安心をもたらす生活とは何か、また、他者が求めている希望や安心の本質とは何かについて考察させた。特に、アグネスのインタビュー記事や「遠い『山びこ』」に描写され

た状況は、人間の生活の「限界（極限的な状況）」とも言える。人間が限界状況で希求して止まない価値とは一体何か。

アグネスによれば、難民キャンプで諸方に散らばった人々は、先生がそこに来ると、再び戻ってそこにコミュニティーを形成するという。

また、「山びこ学校」の無着は、究極の状況下ならば人の肉を食べることもあり得ると子供たちが認めたことに驚き、落胆したという。しかし、そうした子供たちの考えや行動に対する批判はさておき、そこに描かれた事実とはまさに現実の子供の認識実態そのものである。そしてそれは、日常の常識とはかけ離れているとも言える、生存を保つ“一種の常識”であり、目的によって選択された価値である。

学生はこの事例から、特殊な状況下では、普段言われる常識というものが消失してしまう（違う常識が立ち上がる）ことに気付いた。

イ) 《私の思い》

瀬戸上の老人に対する思いが、すり抜ける様な一方通行となったとき、瀬戸上は自分の常識や思いが脆弱で独りよがりなことに気付く。

学生の関心は、特別な状況下では、“常識”が通用しない場合があるということにあった。そこで、実は自分が一体、何に執着していたのか。頑張っ

ているのは意地であり、葛藤かも知れないという、「自己中心」をキーワードに考察を展開した。

この考察を通して、学生は、「動的で無我夢中な自分の目と、それを捉える「静」の自分の眼差しに気付いた。そして、同じように悩んでいたDr.コトーが「しょせん人間」という言葉によって、思い詰めていた心が楽になることができたことに、「静」の眼差しを認め、それによる「救われたような思い」を感じ取った。

ここで学生は、「しょせん」と表現された人間観にまでは思いが及ばなかったが、コトーにとっては、何かを“してあげるという立場”を降りることができずにいたことが“苦”であり、また“葛藤”であることに気付いた。つまり、「しょせん」とは同じ地平に立つ人間関係を意味するものであることに気付くことができたといえよう。しかし、この価値観は「固有の自分もまた特別ではない」という矛盾を含むことを確認させ、学生に根源的な固有性を喪失させる人間の普遍的な楽や幸福の存在について考えさせるに至った。そして、結局、《私の思い》が存在する関係を眺める客観的な視点さえも包摂し、それを眺め得てしまうもう一つの視点（眼差し）が必要となることを確認した。

【a) 課題3の資料】

資料3点の概略

【Dr.瀬戸上の離島診療所日記】 瀬戸上健二郎 小学館 2006年

【Dr.コトー診療所2006】 フジテレビ 2006年

「よく診療所に見えて、いつもおもしろい話を聞かせてくれるおじいさんがいたがパツパツと姿を見せなくなった。脳梗塞を起こして寝たきりになっていた。緊急入院させるがその後のことをさせてくれない。…一見すれば、医療に対して不満の意思を伝えているようにも見える。…形を変えた自殺のようにも見える。医療に対する不信なら努力のしようもあるのだが『どうせよくはならないのだ。これ以上息子たちにも迷惑をかけたくない』と覚悟を決めての拒食なら厄介である。…島のお年寄りたちがよくいう言葉に、『親の長生きは子の不幸』というのがある…」(『第一部 離島医療』より)

【先生は希望なんです】 アグネス・チャン（インタビュー記事）「総合教育技術4月号」小学館 2006年  
 「…それらの例を見て感じるのは、先生の存在がいかに大きいかということです。学校ではなく、先生なのです。極論すれば、学校はいらないんです。先生が戻ってくれば、教育は始まるのです。…」

【遠い「山びこ」】 佐野真一 新潮社 平成17年  
 「『いよいよ食べるものがなくなり、目の前に死んだ人間の肉だけある場合には、それを食ってでも生きのびる』—という思想（…）…。いやいや、『そういう場合人間の肉を食うのか?』という質問に対して三十名全員いっせいに手をあげたではないか。—わたしはねむれなくなった』…。」（無着成恭の日記から）

b) 〈探究〉から〈気付き2〉の段階

○課題1：究極の状況・行き詰まったとき・限界2

…何かしてあげる・助ける？

〈気付き2〉の段階では、当初の気付きからの認識の変容を見取ることになる。これは学生自身においても自己変容を図りながら、同時に自己理解を深めていく本学習の中心的な課題となる。

【活用資料】

ア) 「Dr. コトー診療所2006」

イ) 「東方のドイツの人たち —二つの世紀を生きたドイツ人たちの証言集—」

【考察の視点】

ア) 《任される（託される）とき》

具体的には生死の選択という場面を採り上げる。他者が他者の生死を決定する判断状況に関わり、そこに立ち会うという立場を考察する。

しかし、それは常に他者的な立場による見解であり、未経験な推し測りである。また、それと同時に幸せの選択という視点がある。先に採り上げた、“すり抜けていった患者”（Dr. 瀬戸上の離島診療所日記）の事例も同様で、患者自身の生死の価値観、そして生の選択に関する価値観が、一般的な価値観を打ち破るように露呈することがある。このことは、すり抜ける価値観の前には、一般的な価値観や判断基準（ここでは医学的見解）が、多くの場合に選択される幸福価値としての意義を失ってしまうということを意味する。そしてその消失と同時に“固有

の幸せ”という価値が顕わになり、それ自体が一つの頑なな常識として立ち上がるのである。

イ) 《「当たり前」を越えた判断》

人はどのように判断するのだろうか。判断の根拠とは何であろうか。それは常に理性や明確な理由を伴って言語化できるものだろうか。そして、言語化されない判断根拠を私たちはどのように知り得、なおかつ共通認識し得るのだろうか。

学生は、例えば、「東方のドイツ人たち」にあつては、「ソ連への送還中に、列車の窓から赤ん坊を投げ捨てた」などの場面における当事者の判断やその根拠はどのように説明されるのかということの疑問から考察を始めた。

学生の関心は次の点にあった。

・（「Dr. コトー診療所」のエピソードのことで）「あきおじのことで…自分なら（あきおじのようであれば）幸せだったと思う」

学生は、「～なら」というように当事者が明確には語っていないある価値観に寄り添い、他者の人生の光景領域の中で自分の幸せをイメージし、創出してしまっている。登場人物への感情移入はあるにせよ、私たちはこうした未経験な人生の場面を目の当たりにすることによって、他者の「幸・不幸」を自身の問題として捉えてしまうと同時に、自身の内側に抱えている「幸福」の価値観を他者のそれと混同し、それと思ひこむような可能性（場合によ

では危険性)を常に背負っていることを自覚する必要があると考える。

- ・学生はそれぞれの解釈に任された「幸福」が何かということを探しているのだが、それ自体、またその由来は人の心情・感情にしか見出せないということに気付いた。

ここで、学生は、「幸福」はその心情をもたらす生活そのものこそが「幸福」であると予想しつつ、そこに生じた心情を「幸福」と判断し、なおかつ、内面化することによって初めて「幸福」感が成立するのではないかと気が始めている。言い換えれば、「幸福」には心情を創出する状況や条件が必要であり、心情そのものだけでは「幸福」感は生まれないと考えている。

- ・存在を認められる…理解してもらえる生き方・死に方がある。

学生は、Dr.瀬戸上やDr.コトーのエピソードにある、おじいさんがどのように生きたのかを周囲(他者)が理解し、認めているということに関心を抱いた。「それが幸せであったに違いない」という捉え方もあった。生が終え、死に転じたことは悲しいが、死を含めた意味での生の拡がりの中で、現実の生が認められるということへの気が学生たちにとっては意味のあること(証し)であったと考える。

- ・「幸福」の優先順位が存在しているのだろうかという疑問

学生は、子供が列車から投げ捨てられたという状況に接して、〈だれが幸福になる・だれの幸福〉〈どの幸福〉など、判然としない様々な「幸福」が湧出し、浮遊するかのようなイメージを抱いている。ここにはその状況を遠望し「幸福」を推し測る私自身が立ち上がってくるし、一方、同時に当事者や他者による判断や、それに関わる様々な理由や根拠を明らかにするという課題が立ち上がってくる。

結局、「幸福」を語る場合、「幸・不幸」の価値を規定する主観性や固有性を踏まえ、なおかつ、状況に応じた緊急性や順序性などの判断条件が影響することを認めるとき、ボランティアに関わらず、「良かれ」という判断が、適確にしかも自然に「良い」を選択し、結果として「良い」を生み出すかどうかは、常に予測不可能であり、証明し得ない問題であると考えられる。むしろ、「良かれ」という安易な恣意性に「良い」を期待し、委ねてしまうことは、ボランティア精神の本来の純粋性が、無思慮によって、または、意図的な偽善性によって一瞬にして侵蝕されることを幫助してしまうことにさえなるのだと考えられよう。

(b) 課題1の資料】

【Dr.瀬戸上の離島診療所日記】 瀬戸上健二郎 小学館 2006年

【Dr.コトー診療所】 フジテレビ 2004年

「浜崎進さんは28歳のときに事故で頸椎損傷して四肢麻痺になり、以来45年間寝たきりで…。退院しても、在宅医療で定期的に訪問していたが、あるとき、お腹を触って巨大な大動脈瘤があるのを発見した。…『先生、何をおっしゃいます。先生以外にしてもらったなら(手術)しません。死んでも手打を離れませんよ』…『命は神様に、病気は先生にお任せしています。それで尽きたらそれが寿命。何の迷いもありません』」(『第一部 離島医療』より)ドラマでは、ガンの手術で開腹するが、転移がひどく本人には伝えず在宅での療養に切り替え家族に看取られる老男性にこのセリフを与えている。

【東方のドイツ人たち—二つの世紀を生きたドイツ人たちの証言集—】 平野洋 現代書館 2006年

戦争、民族、国…人々が追いつめられていく。生きていくこともままならない状況下での様々な行動。…そこに、これまで当たってきた資料の状況を比べてみる事ができた。

…結局、当事者以外には理解し得ないことが起きている。

～「…。多くの人たちがソ連送還を逃れようとした。ある女性はソ連に送還される汽車の中でドイツ人との間に生まれた赤ん坊を外に投げ捨てた、という話を聞いたことがある」

○課題2：人の心が動くとき（〈気付き2〉）…ボランティアする理由

【活用資料】

最後に提示する資料として、期待も必要もなかった人間が家族として迎え入れられる瞬間に起きた判断の状況と、その理由を考察することで、他者への関わりの動機を探っていく。資料は、

ア) 「赤毛のアン」（モンゴメリ作・村岡花子訳）、「赤毛のアン（実写版）」である。

【考察の視点】

ア) 《何が変化したのか》

物語の主人公アンは女の子であり、男の子ではない。男の子が必要である価値が尊重されるならば、女の子であるアンは不必要である。つまり、その時点では結果的に尊重された価値をだれも見出せないままにしている。無論、言語化されてもいない。

イ) 《誰のために》

その判断は、アンのための判断だったのか、それともマリラのための判断だったのかという疑問が立ち上がってくる。

ウ) 《特徴的な場面に見取る…マリラの決心》

判断について言語化されていないことと、あえて言語化されずに、描写に潜在する“ある何か”を考察する。語り得ないものが織りなす不可視な内面の光景を感じ取り考察することを学生個々に委ねた。

特に学生が採り上げた表現は

- ・「わしらの方で、あの子の役にたてるかもしれん」
- ・「マリラのところは大きくゆれた」
- ・「あの子を引き取るなんて、わたしもどうかしてるね」

学生は、このようなマッシュウやマリラの言葉の中に、理性の問題のみでは

測り知り得ないような作用や、変化や動きをもたらすものがあることを感じ取った。つまり、前提となる価値基準の働きを予定どおり用いたとは考え難く、一瞬にしてアンが“未だ肯定されないままに否定を解除された”というような、まさに基準の軸が消去され宙間に浮遊しているかのような判断（状況）が確かめられたのである。ここで学生たちは、説明しきれない何かをマッシュウやマリラ、そしてアンと共有したのではないだろうか。

これらの考察を通して、学生の関心は次のことに集約されていった。

- ・説明のつかない判断があった（理由が不明）
- ・それまでのマッシュウとマリラの価値の揺らぎ（？）があった
- ・誰のためだったのだろうか？（直感といえば直感である。しかしそれは振り返って置き換えることすらできないものなのかも知れない。それまでの自分を越えたものが発揮された）

ここに示した学生の関心や気付きは十分に言語化されない、不明瞭にして“ある”ことを否定し得ない表現であり、容易に共感できるものではない。学生のこの気付きは、文章の単なる読み取りによって導き出した価値ではなく、むしろ学生自身の内側で動いたそれ自体であり、動きそのものであると思われる。

II 学生のボランティア観 …〈奉仕〉のイメージについて（V 学生のボランティア観）

これまでの学習を踏まえ、《気付き2》のまとめとして、改めて〈奉仕〉のイメージについて整理させた。学生たちは気付きや感想、自身の価値の変容などを確認しながら以下のようにまとめた。



ボランティア精神・ボランティアについて考えると…、それは

- ①何かを求めて取り組むのではない（こと）
- ②他者の気持ち・思いが大切にされている（こと）
- ③（自他）お互いが良い気持ちでいられる（こと）
- ④互いの思いが一致したときに成立する（こと）
- ⑤（援助）を求められている自分が自ら関わっていく（こと）
- ⑥人間として（本来）もっている“役に立ちたい気持ち”“助けたい気持ち”がある（こと）
- ⑦相手の本心をすべて理解することは難しい…このことを踏まえなければならない（こと）
- ⑧強制されるものではない…“やる”“やらない”を自ら選択（判断）している（こと）
- ⑨はじめは必要とされていることを手伝うという気持ちからやってみてよい。そこから始まる新しい生活展開がある（こと）
- ⑩求められていること以上のことはできない・しない（こと）※

※⑩の気付きについて、学生たちは次のような新たな課題を見出した。それは、ある種の困惑を誘引したともいえるものであった。

…求められている以上のことはできなるとすれば、自他の利（利益）を根本から問い直す必要が生じる。それは“して欲しい以上のことは、して欲しくない”ということだろうか。私たちの関わりが量でも質でも語れないものと考え、結局、他者に対する最もふさわしい働き掛けを模索し続ける以外ないということだろうか…。

学生たちは、⑩によって、⑨までに立ち上げた「動」の関わりを一担冷静に捉え直すこととなった。

また、この課題を追求する糸口として、ある学生は、「求められ、必要とされていることからやってみる」と前置きし、『～がなければと』という形式を用い、次のような考察を

試みている。

- 無償の精神がなければ → 仕事である
- 自らの意思がなければ（強制義務）  
→ 嫌々である
- 何かを感じる心がなければ → 無意味である

結局、学生の変容を通してその内面に見出すことができたのは取り立てて新しい価値ではない。学生の気付きとは殊更、新しい価値の創出ではなく、自分の内側に秘めながら、知らず知らずと育んでいた、未確認の心根こころねのようなものである。それは既に無償の精神や、愛、慈悲など宗教的な精神や価値として語られているが、本実践における学生自身にとっては決して与えられたものではない、心の姿であり、感じ取った動きであったと思う。人間が永遠に希求して止まない精神とは、私たち自身の気付きを繰り返しながら少しずつ自分の内面の奥深くに見出していくものなのだと考える。そして学生が絞り出した様々な考察に基づく純粋な表現を、既に語られている、例えば「自利利他」「無償の愛」「菩薩」「悉有仏性」などの宗教の教理や概念等へと還元して唐突に提示することは、今まさに僅かに弱々しくも輝き始めた心根こころねの原石を、学生から抉り出して略奪することに他ならないだろう。学生は心について深く考え続けることで、傷つけることなく心根を丁寧に磨きあげていくのだと思う。それは、心根の原石から放たれる微弱な光が、自身の非力を嘆きながらも精一杯の力を振り絞って、生来備え持っている“心の琴線”を爪弾き出すかのような、決して見逃してはならない、また、聞き逃してはならない“心根かなの奏で”であり、まさに「価値への近接」なのである。

### Ⅲ さいごに …成果と課題（Ⅵ さいごに）

#### 1. 成果

「保育ボランティア」に対するイメージの確認は、ボランティア精神の考察の前提（考察の題材・テーマ）として適切であった。保育には、本来「援助」「寄り添う」「みんなで」「優しさ」などの意味や価値が含まれ、それらは学生自身も重視している価値である。その意味で、保育や教育、福祉など人との関わりをテーマに採り上げることが「心の教育」を構成する上で有効な手立てであるということが出来る。

また、いくつかの資料を視点を持って考察する

ことを通して学生は、

○他者の苦悩に「動き出す」いたたまれない心情（…慈悲）に気付き

○他者や私、「助けたいと思う本来」（何かは言語化できない）、自他の幸福、無償の精神（愛）などに 気付くことができた。

このことから、私たちが生活する社会や文化、宗教などにおいて自然に求められ、なおかつ埋め込まれている価値や精神に、日常の生活とその振り返りとも言える考察や気付きを通して近接することが可能であると考えられる。

## 2. 課題

実践と考察全体を通して以下の課題が明らかになった。

- 1) 前にも述べたが、ボランティアを学習テーマとして採り上げるときには、通常抱くであろう「動」のイメージと、座学で内面について考察するという「静」のイメージとのギャップについて十分配慮する必要がある。それは、例えば、私を動かすものや理由を探すことへの強いこだわりが、具体的な行動に歯止めを掛けてしまう可能性につながることである。また、理由を意味とか意義と捉え、その追求を目的とすることで、「意味を求めて何かをする」という一種の成果主義になってしまう可能性もある。そこで動き出そうとする自分の心根の純粋性を守る手立てを改めて検討する必要がある。
- 2) 資料活用によって生活場面を様々な立場から捉えることができる一方で、その時々自身の「立ち位置」を捉えることが困難になってしまうことがあり、“誰でもない自分”になってしまうことがある。（「赤ちゃんポスト」の考察で、ポストの意味を考えると、相手の立場という自分」に生じる他者性によって、考察する自分を見失ってしまうことがあった。Dr.コトーや、患者の父子等それぞれの立場が語られる中で、「…だと思う」というように、自分の本心が明かされないままに他者の心情を察したり、成り代わったりすることがあった）
- 3) 資料に描かれた「生活」に対して、学生は実感を伴わずに考察することがあった。その生活が自分にとって現実ではないのにも関わ

らず、こうした状況が自分にも起こり得る、自分にも起こり得る、しかも未経験の、他者の状況に自身が「動く」、または「動かされる」とは一体どうした要因に拠るものなのかを、更に違った視点から考察する必要がある。

- 4) 多様な視点が、結果として多様な価値観の肯定になる可能性がある。例えば多様な価値観によって保つことが困難となってしまう公共のきまりやモラルの遵守の問題が生じる。また、一方の価値観が承認されながら、他方では承認されないものも生じてくる。特に、当事者ではない事象を考察することで起こりやすく、他者について考察する場合には実感や責任を伴わない、極端な価値基準が働きだすことをも想定しておく必要がある。

## 3. 考察

学生は保育者になることを目標に学んでいる。学生にとってこうした学習（…ボランティア精神）は、保育という仕事、保育者としての実人生に活かされなければならず、積極的に活かしていくことが望ましいと考えられる。なぜならそれは、日常生活での他者との関係性における精神の問題だからである。

短期大学（保育・教育者の養成校）で学ぶ学生たちは、学ぶ立場から学びつつ教える、そして教えつつ学び続ける立場への過渡期にあると言える。このような立場として、関係性を変えるときにこそ、人間精神の課題への〈気付き〉という視点に立った学習や経験が必要と考える。それは、立場や関係性が変わることで、逃れることのできない生活者としての視点も必然的に変わるからである。

本実践と考察は「ボランティア精神」の本来性をいくつかの宗教的精神や価値、概念として眺めつつ、そして照らし合わせながら展開してきた。しかし、多くの場合、人間は決して特定の宗教を目的とし、またその教義に沿うためだけに生活しているのではないと考える。中には宗教に包摂されない生きる目的や価値を抱いている場合もあるであろう。だが、直接宗教に語られる言葉や概念、理念を提示しなくても、そうした精神が埋め込まれた生活や社会、文化、人間の行動から学び取ることもできるのだと考える。なぜなら、私たちは、すでにそこに生き、今ある私たちの関係性の中にこそ価値は無言で息づいていると考えるからであ

る。それゆえに、自分の中にある原石を磨いていけるのである。そのためにも、教師は学生（子供）をその価値と価値への気付きへと誘う手立てを知らなければならない。「心の教育」の意味ある実践やその成果は、教師の導き手としての資質によって大きく影響を受けるものと言えるのである。

さて、ボランティアは通常、この研究でも触れたように「やってあげる」や「やらなければならない」という状況で展開されることもある。また、期せずして報酬が派生する場面もあり得る。ボランティア精神の本来性やその維持の問題に固執し、ボランティア活動の展開を無批判に否定することで、そこに期待される成果や意義そのものをないがしろにすることは望ましくない。学生にとっては、「やってあげる」という動機によって始められるものかも知れないが、関わっていく中で、また、立場を変えて社会経験を積みながら、振り返り、活かし、気付きを重ねて、学び取っていくことも十分に期待されるからである。その意味で、はじめに自分が抱いた「そうしたい」という“関係を築き出す思い”を実際の行動に移していく過程にも意味を見い出していくべきであろう。それは、同時に「言葉にはならないもの（心根）に従って私が動く」ことと、私を動かす（動機としての対象となる）他者を尊重することを意味するのである。

ボランティアの考え方や具体的な活動も多様化し、本稿で考察した〈奉仕〉などの精神には集約しきれない価値もあると考えられる。特に、活動を行うことが前提となる場合、他者理解ではなく、困難なる他者の存在が求められる。この点に本来の意義を見出すことは難しい。しかし、場合によっては「お互い様」とでもいうような相互作用、相依相関によってボランティア活動が生まれ、その精神が育まれる可能性も十分にあると考えられる。次第に求められてくる、そして、求められるようになった自分。まさにこの自分の変化は、他者の思いに生み出されたものである。「お互い様」によって関係性は質を変えていく。それは同時に相手が見出している価値観をも変えているということであり、なおかつ「気付き」の変容である。

私たちは、ボランティア精神についての考察を通して、ある価値に近接する過程を辿りながら、

その可能性を確認し、それを「心の教育」と理解した。そして、そこには価値への導き手という存在が必要であることを理解した。価値はその社会の文化、日常生活に埋め込まれており、そこに生きる人間の内面にもまだ発露しないままに育まれている。それゆえに秘められた価値を伝える先達は人間社会において不可欠な存在である。また、関わりを振り返るとき、客観性を越えたもう一つの視点を設定することの必要性をも見出すことができた。それは価値や判断基準にとらわれ、がんじがらめになった客観の視点を眺め、そこに生じた葛藤をときほぐす、あたかも浮遊するような“もう一つの眼差し”と言えよう。

振り返りや反省は時として過去の実人生を裁く厳しさを携えて、私たちに挫折感のみをもたらすことさえもある。しかし、この「気付き」の連続を見守り、その行く末を見守り、未来志向の振り返りを促すような、客観を越えた眼差しこそが、「心の教育」には必要なのではないだろうか。そしてその眼差しを、各人が心の中に見出し、感じ取ることができるようになることこそが、「心の教育」の展開なのではないだろうか。

#### 【文献】

- ひろさちや、愛の研究、新潮社、2002  
 五木寛之・森 一弘、神の発見、平凡社、2005  
 久保田正文、日蓮 その生涯と思想、講談社、昭和 55  
 中村 元、温かなところ、春秋社、1999  
 太田直道、揺れる子どもの心、三学出版、1999  
 太田直道、生き方の道徳教育－現代道徳哲学二十講、三学出版、2008

#### 【活用資料等】

- アグネス・チャン、先生は希望なんです、総合教育技術 4月号、小学館、2006  
 平野 洋、東方のドイツ人たち－二つの世紀を生きたドイツ人たちの証言集－、現代書館 2006  
 モンゴメリ・村岡花子訳、赤毛のアン、新潮社、昭和 54

※併せて次の資料も活用…実写版「赤毛のアン」  
 （映画）松竹富士株式会社  
 無着成恭、山びこ学校、岩波書店、1995

佐野眞一、遠い『山びこ』－無着成恭と教え子たちの四十年－、新潮社、平成 17

瀬戸上健二郎、Dr. コトーのモデル Dr. 瀬戸上の離島診療所日記、小学館、2006

島田洋七、佐賀のがばいばあちゃん、徳間書店、2004

【ほか】

熊本日々新聞（2007.5.15）、※赤ちゃんポストについての記事、2007

毎日新聞（2007.5.22）、※乳児放置についての記事、2007